

フォーラムニュース Vol.11 2020 2/15

発行：フォーラム・子どもたちの未来のために実行委員会

<http://www.f-kodomotachinomirai.com/>

記事／山本省三

写真／澤田精一

シンポジウム「私たちの時代、私たちの表現」開催

～2月1日 於・出版クラブ 満員の会場は熱気がいっぱい！～



昨年7月の京都に続いてのシンポジウムは、冬晴れの土曜日の午後、会場は東京の本の街、神保町にある出版クラブで開かれました。新型コロナウイルスの流行が心配される中の開催でしたが、参加者は150名以上。一般の方に加え、多くの編集者、作家の方々も駆けつけてくださり、うれしい限りです。

フォーラム実行委員の加藤純子さんの開会アナウンスに続き、同じく委員の大竹永介さんが「フォーラム・子どもたちの未来のために」の設立からの経緯を紹介。そして同じく委員の野上暁さんを進行役にシンポジウムの開始となりました。

まず野上さんから、このシンポジウムは大好評だった京都の趣旨を継ぐものであり、タイトルも同じであることの説明がありました。そして、このタイトルを受けて、自作と時代、表現との関りについて登壇者に述べてほしいと要請。一人目は小手鞠るいさんが最新作の「窓」を中心にお話されました。「この作品には戦場カメラマンが登場するが、日本の学生はあまりに戦争や政治問題への関心が薄い」と、米国在住の小手鞠さんならではの見解です。続いては古内一絵さん。作品は「鐘を鳴らす子供たち」。敗戦直後に実際に放送された戦争による浮浪児たちが主人公のラジオドラマ「鐘の鳴る丘」を下敷きに執筆。そこに戦争にまつわる両親の思いをこめて作品を仕上げたことを語られました。森絵都さんは近未来を描いた「カザアナ」について。執筆のきっかけは、今夏の東京オリンピック以後、日本はどうなるのかという漠然とした不安を持つ人々の存在だったそうです。

それぞれの作品の執筆動機などを伺って、どれにも米国が登場することから、米国と日本の関係について、話題は盛り上がります。戦争をしている意識のある米国



民。それを支える役割を負う日本の姿に多くの国民が気づかない問題が指摘されました。

さらに児童書の現状に話は移り、米国をはじめ、登場人物の多様性が進む他国に比べ、

日本の対応の遅れが取り上げられました。

その後来場した作家との意見交換、さらに質疑応答がなされ、二時間のシンポジウムは幕を閉じました。 (報告 山本省三)

● シンポジウムをきいて

K・S

考えさせられることが多く、刺激的なシンポジウムでした。その中でも2つのことが特に印象に残っています。

ひとつは「フィクションの力」についてです。

子どもたちに戦争を伝える方法には3つあるとのことでした。一つは「ノンフィクション」。もう一つは「知識」。そして、三つ目が「フィクション」。「ノンフィクション」と「知識」は、それと対峙しながら、分析的・論理的に理性で理解するものとされました。一方、「フィクション」は対峙するのではなく、自分の中に入り込んで体感する効果があるとの説明がありました。つまり、包括的、感性的に理解させる力が「フィクション」のもつ力であるというものでした。「なるほど!」と思わず納得です。確かに「フィクション」は、心の中から大きく人を揺り動かす力があると思います。「しかし…」とも思います。「戦争プロパガンダ」にフィクションが使われた例もあります。力が強ければ強いほど、その力の持つ危険性にも目を向けて行かなければとも思いました。このフィクションが持つ危険性とバランスを取るためにも、「ノンフィクション」や「知識」との連携が必要なのかもしれません。もう少し時間があれば、「フィクション」がもつ危険性の面とどう向き合うのかについてのご意見も伺えればよかったかなと思います。

もう一つは、「アメリカの影」ということばです。

このことばは、ご登壇者の作品紹介のあと、これらの作品に共通するものとして司会の野上氏が指摘されたものです。「アメリカの影」。ドキッとすることばでした。「見えない影」が、自分の精神や価値観を作り上げる。思えば、戦後、

GHQの民主改革などハード面だけでなく、映画やドラマ、スポーツなどといったアメリカのソフトパワーを通して、アメリカと同じ価値観を共有する国になってきました。そして、今もまだ「アメリカの影」は様々な面で厳然として続いています。しかし一方で、われわれを盲目的に従わせるような「影」のもつ“呪縛”は弱まってきているようにも思います。今こそ、自分の中の「アメリカの影」と向き合い、主体的にとらえ返す時期に来ているのだと改めて思いました。こうしたことを考えながら、今回ご紹介いただいた作家の皆様の作品をじっくりと読ませていただきたいと思います。（東京都在住）

【実行委員の「この1冊」・特別編】

●実行委員が薦める「この1冊」。今回は特別編として、童心社を代表する赤ちゃん絵本のロングセラー「いないいないばあ」（松谷みよ子・ぶん 瀬川康男・え）について、童心社会長でもある実行員の酒井京子からの一文です。



1967年に出版されたこの絵本は、今年700万部を超え、日本で一番売れている「赤ちゃんの本」と言われている。

松谷先生がお元気だった頃「この本は、なぜこんなに赤ちゃんに喜ばれるのかしら？と思う？」と聞かれたことがある。その時私は「この本には、光と闇が交互にくる、これは赤ちゃんにとって凄いことですよ・・・。」と日ごろ漠然と思っていたことを話した。松谷先生は「そうねえ・・・」とおっしゃったきりだったように思う。

最近、社内の若い販売から、この本が刊行された経緯についてもっと知りたいという声があがった。私が入社する前のことだから、調べるしかなかったが、制作過程から見えてきたこととは別に、正置友子さんの著作『メルロ・ポンティとく子どもと絵本>の現象学』に出会ったのは大きかった。正置さんは、この本の絵本としての独自性を語ると共に、この絵本の中には、出会いと別れ・希望と挫折・喜びと不安・明るさと暗さ、つまり人生が描かれていると語っている。このことを、支えているのが文章と絵であるのだと思う。

子どもが初めて出会う絵本は本当に大切な文化であると改めて考えさせられた。

●「フォーラムニュース」11号をお届けします。いつになく盛沢山の内容になりました。ご意見、ご感想、また配信停止のご希望は、メールアドレス f.kodomo.mirai@gmail.com までお送りください●フォーラムの次のイベントは3月25日の前川喜平氏特別講演会です。チラシを別に添えますので、どうぞふるってご参加ください。（大竹）